

Hors thème

複合過去と半過去の教授法における日本語のタ形述語 — アスペクトと時制の弁別、その存在と不在 —

川島 浩一郎

KAWASHIMA Koichiro

福岡大学

k-kawa(at)cis.fukuoka-u.ac.jp

1. はじめに：タ形記号素を経由する複合過去記号素と半過去記号素の使い分けの理解

第二言語習得には、第一言語の影響があると想定してよい。成人による第二言語の理解は、多くの場合、第一言語に立脚した認知的枠組みを通してなされるのが通例である。

たとえば、複合過去記号素と半過去記号素の使い分けを日本語母語話者が学習する際は、日本語のタ形記号素の影響を受けることが想定される。授業経験やアンケート調査によれば、複合過去記号素の用法を、タ形記号素の用法と関連させて捉えている学習者は少なくない。タ形記号素という用語は、「来た」や「来ていた」の「た」などを実現形とする表意単位を意味する。

よって複合過去記号素と半過去記号素の使い分けを日本語母語話者に教授する際は、その前提となる準備として、タ形記号素の機能を理解させることが有効である。本稿では主に、このことを示す。タ形記号素に関する理解が不十分であれば、その不十分さに影響を受けた複合過去記号素と半過去記号素の使い分けについての理解もまた、不十分なものとなりかねない。

タ形記号素の理解には、特に、アスペクトと時制の弁別についての理解が必要である。タ形記号素は、複合過去記号素のようなアスペクト記号素でも、半過去記号素のような時制記号素でもないからである。タ形記号素は、これらの記号素とは異なるタイプの表意単位である。

2. フランス語における複合過去記号素と半過去記号素

2.1 完了アスペクト記号素である複合過去記号素

複合過去の動詞形には、複合過去記号素の実現形が含まれる。たとえば (1) の *ai eu* には、(2) の *ai* には含まれない切片が含まれる。この切片は、複合過去の動詞形を特徴づける最小の切片である。また (1) と (2) の間には、知的意味にもとづく弁別がある。よって、この切片は記号素の実現形である。つまり、複合過去記号素の実現形であると考えてよい。

(1) *J'ai eu peur.* (A. Gavalda, *Je voudrais que quelqu'un m'attende quelque part*)

(2) *J'ai peur.* (B. Aubert, *Transfixions*)

複合過去記号素は、事態の完了を明示するための表意単位である。たとえば (3) の *est parti* には、複合過去記号素の実現形が含まれる。この動詞形によって提示された事態を、未完了の事態として解釈することはできない。(3) は、進行中の事態でも未完了の事態でも、まだ開始されていない事態でもない。(3) の *est parti* によって表現された事態は、時間軸上のいずれかの

時点において、何らかの意味で完了していると解釈せざるをえない。

- (3) *Ludwig est parti hier.* (F. Vargas, *Un peu plus loin sur la droite*)
- (4) *Et maintenant, il a disparu.* (F. Vargas, *Debout les morts*)
- (5) [...], vous m'appellez dès que vous avez fini. (B. Aubert, *Descentes d'organes*)
- (6) Comment retrouver son poids idéal quand on a essayé tous les régimes ? (*Elle*, 7 mars 2005)

つまり、複合過去記号素は完了アスペクト記号素である。アスペクトという用語は、大略、事態が開始してから終焉するまでのプロセスについて、そのプロセスの一部を表現するための文法カテゴリーを意味する。事態が完了していることの標示は、アスペクトであると考えられる。複合過去記号素は、開始から終焉に至るプロセスのうち終焉部分しか標示しない。事態の開始を標示することもなければ、事態が進行中であることも標示しない。

複合過去記号素は、時制記号素ではない。時制という用語は、事態がどのような時間領域に位置づけられているのかを表現するための文法カテゴリーを意味する。実際、複合過去記号素の使用には時間的な制約がみられない。たとえば (3) は過去時間に、(4) は現在時間に、そして (5) は未来時間に位置づけられた事態である。また (6) は、特定の時間領域に位置づけられた事態ではない。複合過去記号素は、このように、時間概念のない非時間的な概念領域を含む、すべての時間領域に対応可能である。複合過去記号素は、時制記号素ではないからである。

2.2 過去時制記号素である半過去記号素

半過去の動詞形には、半過去記号素の実現形が含まれる。たとえば (7) の *était* には、(8) の *est* には含まれない切片が含まれる。この切片は、半過去の動詞形を特徴づける最小の切片である。また (7) と (8) の間には、知的意味にもとづく弁別がある。よって、この切片は記号素 (最小の表意単位) の実現形である。つまり、半過去記号素の実現形であると言ってよい。

- (7) *Il était 21 heures.* (P. Siniac, *Femmes blafardes*)
- (8) *Il est 21 heures.* (J.-Y. Cousteau, *Le monde sans soleil*)

半過去記号素は、過去時制記号素である。過去時間に位置づけられた事態について、その事態の過去性を表示するための記号素を過去時制記号素と呼ぶ。半過去記号素は、事態を過去時間に位置づけることに特化した表意単位である。たとえば (7) の *il était ...* は「過去時間における時刻」を表し、(8) の *il est ...* は「現在時間の時刻」を表現する。(7) と (8) の意味的相違は、事態の時間的な位置づけが「過去時間」にあるか「現在時間」にあるかだけである。半過去記号素の存在理由は事態を過去時間に位置づけることであって、それ以上でも以下でもない。

- (9) [...] : quand Sartre *terminait* une pièce, elle était immédiatement montée, parfois par les plus grands. (*Elle*, 30 mai 2005)
- (10) L'ambassadeur *terminait* une conversation téléphonique lorsque Voronkof entra dans son bureau. (T. Breton & D. Beneich, *Softwar*)
- (11) Jadis elle *était* révolutionnaire, maintenant elle est dépassée. (B. Werber, *Les fourmis*)
- (12) La vie *était* dure dans ce pays, elle l'est toujours aujourd'hui, [...]. (M. Levy, *La première nuit*)

したがって半過去記号素にとって、事態が完了しているのか未完了であるのかの弁別は、非本質的な単なる解釈の問題にすぎない。半過去記号素を用いて表現された事態は、(9) の *Sartre terminait ...* のように完了している (書き終えた) と解釈されることもあれば、(10) の *l'ambassadeur terminait ...* のように完了していない (終える途上) と解釈されることもある。(11) の *elle était révolutionnaire* のように完了した事態として解釈されることもあれば、(12) の *la vie était dure ...* のように未完了の事態として解釈されることもある (3.3 を参照)。

2.3 アスペクト記号素と時制記号素の弁別

2.3.1 表意単位の成立と弁別

表意単位の成立には、弁別が必要である。「明るい」と「明るくない」の弁別がないかぎり「明るい」という概念は成立しない。よって「明るい」を意味する表意単位も成立しない。

つまり表意単位は、概念を他の概念から弁別するためにある。たとえば「右」という表意単位は「右」概念を、それ以外の概念（「左」など）と弁別するためにある。同様に「左」という表意単位は「左」概念を、それ以外の概念（「右」など）と弁別するためにある。

また、コミュニケーションにおいて概念の明確な弁別が成立するためには、表意単位が必要である。コミュニケーションが成立するには、概念が共有される必要がある。そして概念の共有が成立するためには、その概念を共有し表現するための表意単位が必要である。

したがって「表意単位が存在すること」は「複数の概念が弁別されていること」と、いわば同義であると言ってよい。「右」および「左」という表意単位が存在するには「右」概念と「左」概念が弁別されていることが必要である。コミュニケーションにおいて「右」概念と「左」概念が弁別されるためには、これらの概念を共有し表現するための表意単位が必要である。

2.3.2 複合過去記号素と半過去記号素の弁別

複合過去記号素および半過去記号素が存在するのは、これらの間に弁別があるからである。表意単位の成立には、概念的な弁別が必要である（2.3.1を参照）。複合過去記号素は、完了アスペクト記号素である（2.1を参照）。半過去記号素は、過去時制記号素である（2.2を参照）。

すなわち複合過去記号素と半過去記号素は、互いからの弁別を含意した存在である。表意単位は、概念を他の概念から弁別するための存在だからである（2.3.1を参照）。複合過去記号素の存在は半過去記号素との弁別を前提にする。半過去記号素の存在は複合過去記号素との弁別を前提にする。両者の間に弁別がなければ、これらの表意単位の存在意義に変化が生じる。

3. 日本語のタ形記号素とフランス語の複合過去記号素、半過去記号素

3.1 タ形記号素の文法カテゴリー：アスペクト記号素でも時制記号素でもない表意単位

日本語のタ形述語には、タ形記号素の実現形が含まれる。たとえば(13)の「答えた」には、(14)の「答える」に含まれない切片が含まれる。この切片は、タ形の述語を特徴づける最小の切片である。また(13)と(14)の間には、知的意味にもとづく弁別がある。よって、この切片は記号素の実現形であると言ってよい。この記号素を、タ形記号素と呼ぶこととする。

(13) 僕は答えた。(森博嗣『デボラ、眠っているのか?』)

(14) 僕は答える。(森博嗣『デボラ、眠っているのか?』)

日本語の述語にあっては、完了アスペクトと過去時制の弁別がない。述語が表す事態の完了を表示することのできる表意単位は、タ形記号素しかない。また述語が表す事態を過去時間に位置づけることができる表意単位も、タ形記号素しかない。つまり両者の間に弁別がない。

したがってタ形記号素は、本質的に、完了アスペクト記号素でもなければ過去時制記号素でもない。日本語の述語においては、完了アスペクトと過去時制の弁別がないからである。完了アスペクトと過去時制の弁別がないかぎり、時制記号素との弁別を含意した完了アスペクト記号素もなければ、完了アスペクトとの弁別を含意した過去時制記号素もない（2.3.1を参照）。

つまりタ形記号素は、少なくとも、フランス語の複合過去記号素や半過去記号素と等価な表意単位ではありえない。タ形記号素の存在は、複合過去記号素や半過去記号素とは異なり、完了アスペクトと過去時制の弁別に立脚していないからである（2.3.2を参照）。実際、タ形記号素には、完了アスペクト的な側面と過去時制的な側面の両面がみられる（3.2と3.3を参照）。

3.2 フランス語の複合過去記号素と日本語のタ形記号素

複合過去記号素の使用に、時制的な（事態の時間的な位置づけに関する）制約はない。複合過去記号素は、時制記号素ではないからである（2.1を参照）。

- (15) 私は一九〇一年に生まれた。（岡潔『日本のこころ』）
- (16) 「もうぜったいお腹がすいた。[...]」（樋口有介『風少女』）
- (17) 「そうなったときはそうなったときです。[...]」（長崎尚志『パイルドライバー』）
- (18) 二十歳過ぎたらただの人ってやつさ。（北川歩実『もう一人の私』）

タ形記号素による時間的な位置づけは、過去時間への位置づけにかぎらない。タ形記号素は過去時制記号素ではないからである（3.1を参照）。実際（15）は過去時間に、（16）は現在時間に、そして（17）は未来時間に位置づけられた事態である。また（18）は特定の時間領域に位置づけられた事態ではない。タ形記号素は、複合過去記号素と同様に、時制記号素ではない。

複合過去記号素は、事態が未完了であることを表現することができない。あるいは、それが非常に難しい。複合過去記号素は、完了アスペクト記号素だからである（2.1を参照）。

- (19) 外は、雨だった。（片岡義男『ふたとおりの終点』）
- (20) [...], ひたすら自分を責め続けていた。（喜多喜久『ラブ・ケミストリー』）

一方、タ形記号素は未完了の事態に対応することができる。タ形記号素は、完了アスペクト記号素ではないからである（3.1を参照）。たとえば（19）の「雨だった」や（20）の「責め続けていた」は、これらの事態が完了していることを含意していない。なおタ形記号素は、（15）にみられるように、完了した事態に対応することもできる（3.3を参照）。タ形記号素は、半過去記号素と同様に、アスペクト記号素ではないと考えてよい（2.2を参照）。

3.3 フランス語の半過去記号素と日本語のタ形記号素

半過去記号素は、事態を過去時間に位置づけることに特化した表意単位であると言ってよい。半過去記号素は、過去時制記号素だからである（2.2を参照）。

一方、タ形記号素は事態を過去時間に位置づけることに特化した表意単位ではない。タ形記号素は、過去時制記号素ではないからである（3.1を参照）。タ形記号素による時間的な位置づけは、複合過去記号素と同様に、過去時間への位置づけにかぎらない（3.2を参照）。

半過去記号素には、事態が完了しているか未完了であるかの弁別がない。半過去記号素は、事態を過去時間に位置づけることに特化した過去時制記号素だからである（2.2を参照）。

- (21) 「付き合ってるんじゃないよ。過去形。正確には、付き合ってた」（辻村深月『水底フェスタ』）
- (22) 彼女は自分の恋人だった。今もそうだし、一年前もそうだった。（東野圭吾『パラレルワールド・ラブストーリー』）

タ形記号素にも、事態が完了しているか未完了であるかの弁別はない。タ形記号素は、完了アスペクト記号素ではない（3.1を参照）。実際、タ形記号素は完了した事態にも、未完了の事態にも対応することができる（3.2を参照）。たとえば（21）の「付き合ってた」は、発話時点でも付き合いが継続していることを含意しない（付き合いは完了した）。他方（22）の「恋人だった」は、発話時点でも恋人である状態が続いていること（未完了であること）と矛盾しない。

4. おわりに：複合過去記号素と半過去記号素の使い分けに関する教授法的観点から

何を弁別して何を弁別しないかが、言語によって異なることがある。フランス語では、たとえば、名詞記号素の実現形を可算的に扱うか不可算的に扱うかに弁別がある。日本語に、そのような弁別はない。第二言語習得には、様々な弁別の有無を学習するプロセスが含まれる。

つまり第二言語習得においては、第一言語にない弁別をあらたに学習する必要が生じる場合

がある。反対に、第一言語にある弁別を無視することに慣れる必要が生じることもある。

フランス語の複合過去記号素と半過去記号素の間には、それらがアスペクト記号素であるのか時制記号素であるのかという文法的な弁別がある。複合過去記号素は、完了アスペクト記号素である (2.1 を参照)。半過去記号素は、過去時制記号素である (2.2 を参照)。

よって複合過去記号素と半過去記号素の使い分けには、少なくとも次の三種類の弁別が関与する。(a) 事態を完了したものとして表現する必要があるのか、その必要がないのかというアスペクト的な弁別。(b) 事態を過去時間に位置づける必要があるのか、その必要がないのかという時制的な弁別。(c) 事態をアスペクト的に表現するのか時制的に表現するのかの弁別。

一方、日本語のタ形記号素にはアスペクトと時制の弁別がない。タ形記号素の使用には、複合過去記号素と同様、時制的な制約がない (3.2 を参照)。タ形記号素は、半過去記号素と同様、完了した事態の表現にも未完了の事態の表現にも対応ができる (3.3 を参照)。タ形記号素は、完了アスペクト記号素でもなければ過去時制記号素でもない表意単位だからである (3.1 を参照)。タ形記号素の実現形を含む述語は、ようするに、完了形でもなければ過去形でもない。

(23) Et alors... il a été gentil. (M. Dugowson, *Mina Tannenbaum*)

(24) Pauvre garçon, il était gentil. (S. Brussolo, *La nuit du venin*)

このようなタ形記号素についての理解は、日本語母語話者にとって、複合過去記号素と半過去記号素の使い分けを理解する際の助けとなりうる。タ形記号素を完了アスペクト記号素であると誤認しても過去時制記号素であると誤認しても、その誤解を複合過去記号素と半過去記号素の間にある (アスペクト的かつ時制的な) 弁別に対応させることはできない。実際 (23) と (24) をタ形記号素を用いて等しく「優しかった」と解釈、和訳できてしまうのは、タ形記号素に、複合過去記号素と半過去記号素の間にある弁別が欠けているからに他ならない。そのため授業において、この弁別の存在を (学習者も教員も) 不問に付してしまうことになりがちである。「優しかった」の仏訳に複合過去か半過去かの選択肢があることも、曖昧化しかねない。

したがって、複合過去記号素と半過去記号素の使い分けを日本語母語話者に教授する際には、その準備段階として、アスペクトと時制の弁別を明確に理解させることが有効だと考えられる。日本語において過去表現のツールとして多用されるタ形記号素に、アスペクトと時制の弁別が欠如しているからである。アスペクトと時制の弁別を理解することは、日本語母語話者にとって、複合過去記号素と半過去記号素の使い分けを学習するための出発点だと言ってよい。

このためには、アスペクトと時制の弁別を要領よく理解させる目的のタスクの研究、開発が望まれる。実際 (英語での現在完了形と過去形の弁別として概略に触れてはいても) アスペクトと時制の違いを理解できていない学習者は少なくない。この弁別の理解を難しいと感じる学習者も意外に多い。母語にあるタ形述語を、過去形としてのみ捉える学習者も少なくない。

参考文献

川島浩一郎 (2014) 「教科書における無標の過去時制 : 半過去の教え方」『Rencontres』第 28 号, 関西フランス語教育研究会, 107-111: 川島浩一郎 (2015) 「複合過去と半過去の区別に関する一考察 — 現在時との関係の有無 —」『福岡大学人文論叢』第 47 巻第 1 号, 151-163: 川島浩一郎 (2015) 「複合過去形と半過去形の選択にかかわるタスクデザイン — 時制的弁別とアスペクト的弁別 —」『福岡大学人文論叢』第 47 巻第 3 号, 787-812: 川島浩一郎 (2016) 「無標の過去時制記号素 : 半過去形の教授方針」『Rencontres』第 30 号, 関西フランス語教育研究会, 74-78: 川島浩一郎 (2017) 「複合過去および半過去における点的解釈と線的解釈」『福岡大学教職課程教育センター紀要』創刊号, 33-44: 渡瀬嘉朗 (2012) 『統辞理論の周辺』三修社。